歴史民俗資料館特別展

屏風祭

―池田の文化をひらく― その3

歴史民俗資料館では、10月15日㈯から12月4日㈰まで、「屏風」をテーマに池田の文化を振り返る特別展を開催します。10月号では、近代の屏風から木谷（吉岡）千種《をんごく》をご紹介します。

近代の屏風と展覧会

明治以降、西洋建築が取り入れられ、生活様式の西洋化が進むと、家具としての屏風は実用性を失っていきました。一方で、西洋建築を模倣した大空間の博物館が建設され、そこで官設の展覧会が開催されるようになると、屏風にも変化が表れました。多くの画家たちが、展覧会場で存在感を発揮する屏風形式に着目し、会場芸術に用いるようになります。

とりわけ、1907（明治40）年に創設された文部省美術展覧会（以下、「文展」）は、新人・中堅画家の登竜門として重視され、画家たちは入選をめざし大作を送りこみました。しかし、初期の文展は東京、京都画壇の作家が中心で、大阪からの入選者は限られていました。その中で、新しい美人画家として注目を浴びたのが北野恒富です。

恒富は、湯帰りの二人の芸妓が一つの傘に寄り添う後姿を描いた「日照雨」で第五回文展の三等賞を得ます。以後、浮世絵に通じる女性の美を、肉感のある身体表現で大画面の屏風に描いた風俗画を制作し、それらは大阪情緒を表す美人画として好評を博しました。

屏風は、展覧会場という公の場で、作者が自由で新しい表現を生み出すための〝キャンバス〟となっていったのです。また、私的空間で限られた人物によって共有されるのではなく、公的空間でさまざまな人に鑑賞されるものへと変化していきました。

木谷（吉岡）千種《をんごく》

女性画家木谷（吉岡）千種（1895～1947年）が池田在住時期に制作した《をんごく》は、六曲一隻屏風で、恒富の系譜にあり、また彼女の画家としての出発点といえる作品です。

千種は、大阪市北区堂島に生まれ、1915～18（大正4～7）年、池田・室町の叔父、吉岡重三郎宅に寄寓しました。1915年、20歳にして《針供養》で第9回文展に初入選を果たし、大阪の女性画家として世間に知られるようになった千種は、精力的に活動を行います。

当時、文展への入選は、画家の生涯を左右する問題でした。とりわけ、数少ない女性画家、大阪出身の千種にとって、文展への挑戦は、未来を切り拓く強い決意のもとであったでしょう。1918年、第12回文展で念願の入選を果たしたのが、《をんごく》でした。

《をんごく》とは、江戸時代から旧大阪市内で唄われた夏の遊戯歌です。盂蘭盆会の夜、子どもたちがちょうちんを手に唄いながら町内の狭い路地を練り歩く風習が明治ごろまで続きました。

木谷（吉岡）千種《をんごく》
1918（大正7）年　大阪中之島美術館蔵

千種は、「それを汚い油屋の店の間から一人の娘が格子越しにのぞいているところ」を描き、格子にすがって、をんごくの歌に聞き入っている娘は、亡き弟の思い出にふけっている私だと述べています。

本作を描いた年の7月、千種は幼い弟を病気で亡くしており、行列から娘のほうを振り向く子には、弟の面影が重ねられているといわれています。

東京の美人画の大家・鏑木清方は、「作者が画きたくてたまらないものを画いたという意味において、閨秀（優れた女性）画家の出品中で一番よいと思います」と心情と結びついた主題を称賛しました。

暗い色調の中に、格子越しにぼんやりと明るい提灯の光や、町内に響いているであろう子どもたちの遊戯歌が、亡き弟を思う千種の心の温かみや、在り日の大阪風俗への郷愁を感じさせる作品です。文展への入選を志して奮闘した千種の若き日の情熱を思いながら、展示室でじっくりと鑑賞していただければ幸いです。

◆問い合わせは歴史民俗資料館
☎751・3019